

## 8節 両極地方

南極も北極も厳寒の不毛の地であるが、比較してみると様々な違いが見られる。南緯 66° 33' 以南を南極圏、北緯 66° 33' 以北を北極圏と呼んでいる。この緯度は白夜と極夜の南限、北限を示している。

南極といった場合、狭義には南極大陸を指すが、一般には棚氷が広がる海域をも含めて呼んでいる。南極大陸は、「氷の大陸」とも呼ばれているように平均厚さ 2,450m の氷床で覆われている。最も厚い所は 4,500m を越し、地球上の氷河の 90% が集中している。

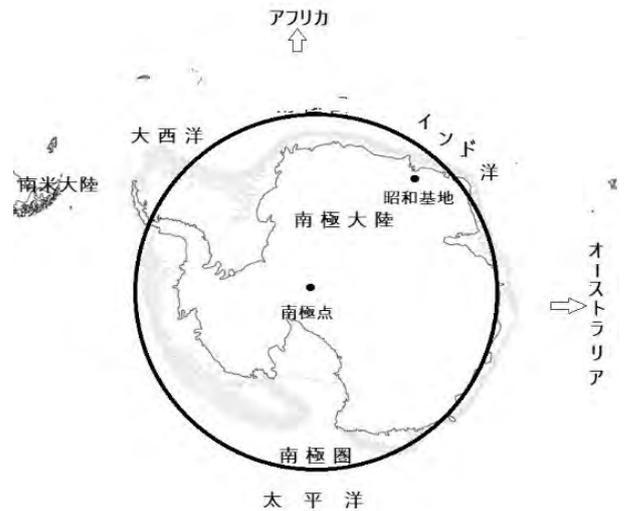
氷に覆われた大陸ということから年間の平均気温は -50~-60℃、最低気温は -89.2℃ と凍てつく大陸である。また、大陸内陸部は、年間降水量が 50mm 以下と少なく、降水量より昇華(\*)によって失われる水分が多く、世界最大の沙漠が広がっている。

(\*) 固体が液体の状態にならずに直接気体に変化する現象

南極大陸は孤立した大陸である。最も近い南アメリカ大陸南端のフェゴ島からでも約 1,000 km、オーストラリアのタスマニア島からは約 3,500 km も離れている。動物の移動が難しく種類は少ない。最大の生物はペンギンで他にアザラシ、オットセイ、クジラなど水生哺乳類が生息している。また、人類がその存在を確認し、初めて上陸したのが 19 世紀初頭でほんの 200 年ほど前のことである。

過酷な自然条件のため人間の定住は難しいが、およそ 1,000~5,000 人が大陸に点在する 80 程の基地、研究所で年間を通して滞在している。なお、南極点を中心とした南極大陸及びその周辺の地域、即ち南緯 66° 33' 以南は、南極条約によってどの国も領土権を主張しないこと、軍事目的の利用などが禁止されている。

一方、北極は北極海とその海域の島々や寒帯気候の大陸沿岸を含めて呼ぶ場合が多い。北極は、北極点を含め約 80% が北極海である。北極海と太平洋の境はベーリング海峡だが、大西洋と境界はとなると少し複雑になってくる。一般にはグリーンランドからスヴァールバル諸島とノルウェー北端ノール岬を結んだ線で、北大西洋海流の流れ込むノルウェー海は含まれないのが一般的である。北極の氷は海水が凍った海水で厚さは数m、最も高くなっても 10 メートル位といわれている。また、北極は北極海の膨大な海水域である。海は陸地に比べて熱容量が大きいので温まりにくく、冷えにくい特徴がある。海氷が発達する冬季でも海水温は -2℃ 程と



言われ、年平均気温は-25℃位で南極に比べてかなり高い。また、南極同様降水量は少なく、南極について地球上2番目に広い沙漠が発達している。

北極圏はユーラシア大陸と北アメリカ大陸に囲まれている。大陸北辺の北極圏はツンドラ地帯であるが、ロシアのコラ半島北部のムルマンスクは人口27万人（2021）、北シベリア低地のノリリスクは17.5万人（2021）、フィンランドのロヴァニエミは6.4万人（2021）の都市が存在し、230万人以上が定住生活を送っている。その中には北欧、スカンジナビア半島北部にはサーミ人<sup>(\*)</sup>、カナダ北部やグリーンランドにはイヌイトなどの先住民族が5万人も含まれており、そのうち約10%がトナカイの遊牧で生計を立てている。北極圏内にはホッキョクグマ、トナカイ、ホッキョクキツネ、ジャコウウシ、ホッキョクウサギなどの陸生哺乳類に加えてセイウチ、アザラシ、クジラなど数多くの野生動物が生息している。

北極海は公海であり、北極圏の内側はカナダ、アメリカ、ロシア、フィンランド、スウェーデン、ノルウェー、アイスランドとグリーンランドを有するデンマークの8カ国の領土になっている。

なお、北極海の面積はおよそ1,400万km<sup>2</sup>で、南極大陸の1,383万km<sup>2</sup>でほぼ同じである。また、一生のうち一度は見てみたい大気の発光現象である神秘のオーロラ、英語では“northern lights”は、南極と北極で同時に同じような形態で発生するという。

(\*)サーミ人 スカンジナビア半島北部、フィンランド及びロシア北部からコラ半島にかけて居住する先住民族。かつてはラップ人と呼ばれていたが古語、蔑称から自らをサーミ人と呼ぶようになった

## ① 南極大陸

南極大陸は19世紀前半に発見され、19世紀末から20世紀にかけて、数多くの探検が行われた。初の南極点到達は1911/12のノルウェーのアムンゼン隊であった。南極到達を争っていたイギリスのスコット隊は1ヶ月遅れ、帰路全員が遭難という悲劇に見舞われた。

南極大陸の冬は巨大な海氷ができ、大陸の面積は夏の2倍になる。大陸の95%以上は氷河に覆われており平均標高は2,300m、世界で最も平均高度の高い大陸である。内陸部は低温（地球上最低気温で-89.2℃<sup>(\*)</sup>）に加え、強風（ブリザード、最大風速89m/s）が吹く厳しい気候で知られる。なお、内陸部の降水量は年間50mm以下で地球上最大の沙漠が分布している。

南極大陸には各国の調査、観測基地があり、毎年越冬隊を派遣している。世界で最も過酷な大陸に石炭、石油などの鉱物資源が大量に埋蔵されていると考えられており、イギリス、ノルウェー、アルゼンチン、チリ、オーストラリア、ニュージーランド、フランスの7カ国が大陸の領有権を主張している。しかし、イギリスとアルゼンチンとチリの主張が重なっていることもあり、1961年南極条約以降全ての領土保有が停止された。さらに、1991年の24カ国、が結んだ条約で、最低50年間は石油その他の鉱産資源の探査なども禁止されている。

南極における領有権主張の一覧 PC wikipedia  
「南極における領有権主張の一覧」一部加筆し引用

各国の南極調査で様々なことが解明されてきている。哺乳類や恐竜の化石発見で Gondwana 大陸分裂が明らかになった。過去の氷河研究から古い気候が解明され、南極が世界の気候に与えている影響が解ってきた。南極に住む魚類が血液中に不凍物質を持っているため、氷点下でも生存できることも明らかになった。日本も 1957 年に昭和基地を建設し研究を続けており、オゾンホール発見などの成果を上げている。

話は逸れるが、日本の通常「南極観測隊」は、正式には「南極地域観測隊」で、国内向けの呼称である。外国向けは "Japanese Antarctic Research Expedition" (JARE) となっている。二つの呼称の間に微妙なニュアンスの違いがみられる。

(\*) 地球の最低気温を更新  $-93.2^{\circ}\text{C}$  (2010/08) — アメリカ航空宇宙局 (NASA) 発表 地球観測衛星によって収集されたデータから作成された。なお、人間が恒久的に住んでいる所の最低気温はロシア オイミヤコンで  $-67.8^{\circ}\text{C}$

### <南極大陸への伏線>

1957 年、高校の時に日本の南極観測隊が始まった。その後、夢中になった冬山の先に漠然とながらも白い大地への夢を馳せていた。振り返って見ると、3つの伏線が思い浮かんでくる。

1つ目は、高校の山岳部部室で3年部員の NG さんが「南極に行くことに決めたから、商船大学に行く」の言葉が心に響いた。その後、初代宗谷の機関長として夢を実現されたことを知り、南極大陸が身近な存在になった。

2つ目は、2000年2月、北極圏のラップランド(\*)に入った。そして、いつかは南極圏にも思いを持ち続けていた。

3つ目は、2006年11月、地の果てウスワイアで南極海クルージングの船を目の当たりにした。そして、アルゼンチンでチケットを購入すれば何とかなることを知った。

(\*) ラップランド スカンディナヴィア半島北部からコラ半島に至る地域

### <南極クルーズ船>

ウスワイアを拠点にした南極クルーズ船は、大小合わせて37、38隻あるという。夏季の4ヶ月の間だけの観光だが、1隻11航海が基本だと耳にした。今回利用したオルロバ号には100名乗船していた。他にオーストラリア、タスマニア島発の船舶、不定期だが飛行機もある。年間で南極大陸に向かう観光客はかなりの数になる。

気になる料金だが、日本からのパックツアー募集記事を見ると手も足も出ない。でも、ウスワイア発着で船底の最低料金となると何とかなる。というのも宿泊、食事、交通費などなど一切含まれている。これを日割計算してみると、3.5 ~ 4 万円くらいである。普通の旅より高いがどうにもならない金額ではない。定員割れやキャンセル待ちだと割安になると聞き、パタゴニアの旅の後、ウスワイアの上野山荘で自炊をしながら1週間ほど格安切符を探し求めたことがあった。夏季のウスワイアは南極がらみの観光客でごった返しており、ウスワイア脱出の航空券がなかなか手に入らずやきもきした。南極クルーズ断念を上野山荘オーナー、凌子おばあさんに伝えると、「来年、また来なさい!」だった。

翌年、ウルグアイ、パラグアイとアルゼンチンのパンパを旅してからウスワイアに入り、南極ク

クルーズ船に乗り込んだ。クルーズ船のチケットはブエノスアイレスで地元業者を介して購入した。最初、調度品がマホガニー材で統一されているというマルタ船籍で、現地発着ツアー会社GAP社所有エクスプローラ号を申し込んだ。生憎、最安値の船底船室は満席だったので、2日後出港のマルタ船籍オルロバ号を選択した。ところが、オルロバ号が出航して3日目、南極海を航行中のエクスプローラ号が冰山か氷塊に衝突し沈没したことを知った。深夜、日本でこのニュースを聞いた娘が母に連絡をしたことを後で知った。母と娘の会話は、出航日がほとんど同じなので、ひょっとすると乗船しているのでは…と思ったという。そして、好きなことをやっての事故なら致し方なしとまで話していたことを帰国後に知った。



### <南極大陸への航路>

日本人が南極大陸に上陸するには環境省へ上陸届の提出が義務付けられている。パソコンで用紙をダウンロードし提出した。日本からの南極大陸は、最短距離ではそんなに遠いところではない。ところが、クルーズ船の発着地である南米の南端、ウスワイアとなると、日本から正に地の果てで遠いところになってしまう。ウスワイアまでは、成田→トロント（カナダ）（乗換）→サンチャゴ（チリ）（一時降機）→ブエノスアイレス（アルゼンチン）（乗換）→ウスワイアで、飛行時間だけで35時間を超す。これに乗継待ち時間など9時間余加わる。

今回はブエノスアイレスでストップオーバーし、パンパやパラグアイ、ウルグアイ、イグアスの滝などを1ヶ月旅してからウスワイア入りし、上野山荘で3日間身体を休めてから乗船した。

マルタ船籍クルーズ船オルロバ号は、船長はじめ乗組員のほとんどはロシア人だった。乗船客の1/3が中国人で、船内放送は英語の後に中国語が流れた。乗船後すぐに救命胴衣の着用、避難経路の確認など避難訓練の講義と実技があった。その後、歓迎パーティー、豪華デナーへと続き、静かなビーグル海峡を通過した。真夜中、ローリングとアップダウンで目を覚ました。最安値の船底前方は最も揺れるところだ。「唸る50度」に差し掛かったことを知った。これから「叫ぶ60度」が待っている。ここドレーク海峡は365日嵐の海だ。距離にして1,000km、通過するには51時間かかる。

### <南極大陸上陸服装>

南極大陸は寒帯だから当然寒い。温帯にある富士山と冷帯の大雪山の山頂付近は、寒帯のツンドラ気候である。日本の冬山は、南極大陸と同じ寒帯の冰雪気候を疑似体験できる。日本の山で経験した最低気温は富士山と北アルプスの-32℃。従って、南極大陸行にあたり購入したものはなく、冬

山の装備で間に合った。参考までに記すと

帽子（キャップ-ナイロン）、耳カバー（兼：ネックウォーマー-ポリエステル）、ネックチーフ（シルク）、手袋 5 本指 2（防水シンサテック、ポリエステル）、アンダーシャツ（アクリルとポリエステル混）、シャツ（ウールとポリエステル混）、中間着（ポリエステル）、軽ダウンジャケット、アンダーパンツ（ポリエルテル）、タイツ（アクリルとポリエステル混-未使用）、パンツ（ポリエステル）、雨具（上下-ゴアテックス）、靴下 2（薄：シルク、厚：ウール） これら全てが 35 cm×50 cm ナイロン布の袋に収まった。履物（ゴム長）は、事前にサイズを申し込み船で貸与

### <南極旅行の注意事項>

「南極旅行規約に基づく環境に対する配慮」というのがあり、環境、生態系を守るため上陸中のトイレ、喫煙は禁止。石を砕くことも駄目だった。「何も持ち込まない、何も持ち帰らない」が鉄則。従って、船舶に帰ると、靴の汚れ落としと消毒、そして点検と徹底していた。また、ペンギンは 5m、アザラシは 15m 以上近づかない。ただし、向こうから近づいてきたら仕方がない。

実際に南極大陸に上陸した時は、波打ち際の岩石は花崗岩で、ぴりっとした寒気の中で冰雪と岩、海が織りなす景色の美しさに感動した。雪と氷と岩の景色なら、何処でも同じ様に思いがちだが、その場所ごとの顔が在る。ヨーロッパアルプスは、明るく華やかでこじんまりしているし、カナディアンロッキーは広漠として掴み所のない感じの氷原だった。ヒマラヤになると、急峻な氷壁で無限の奥行きを感じる。パタゴニアでは、いつも強風に晒され、ねっとりとした氷のように感じだった。また、アンデスや天山になると、乾燥しきった氷で、一際眩しく感じた。

### <南極大陸上陸>

幸運にも冰雪の世界に来てはじめて青空が広がり、明るい日射しのもとでの南極大陸上陸だった。とはいっても極点まではまだ 2,880 km もある。南緯 66° 33' の南極圏にも入っていない。大陸から西経 70° から 60° にかけて北に伸びている南極半島の南緯 65° 弱地点のアルミランテエブラウンである。

上陸地点は花崗岩の岩場だった。赤ペンキに塗りつぶされた 5 棟ばかり建物があり、アルゼンチンの国旗が描かれていた。捕鯨船の停泊地として人間が住みつくようになったが 1985 年、その後、火災によって放棄され、夏のごく限られた期間だけペンギンの生態調査で利用されていると



のことだった。

後方の雪に覆われた山を目指して歩いた。さすがにここまではペンギンも登ってこない。先頭のスタッフと2人だけで美しすぎる風景を前に、言葉少ないひと時を持てた。足元から雪稜がごつごつした岩山に伸び、残り三方は氷雪の山々に囲まれた海面で氷河から流れ出た氷が漂い、岸边ではペンギンと人間がよちよちと動き回っているのが望まれた。

### <ペンギン>

寒帯の氷雪気候は無生物の世界だが、海岸となれば話は別である。ペンギンはじめアザラシやトウゾクカモメなどなどが生息しており、感動の一要因だった。ペンギンの種類は17~18種類だが、今回はアゴひげペンギンとジェンツーペンギン中心だった。なかでもジェンツーペンギンは、嘴と足がオレンジ色で、美人(?) コンテストをやれば間違いなく上位当選する美貌だった。小石の巣で抱卵するが、小石の奪い合いでペンギン同士の争いが絶えない。卵と雛はトウゾクカモメから狙われる。親鳥はレオパードアザラシやシャチから狙われる中で、一生懸命生きていた。

写真のペンギンの腹が赤く汚れているのはオキアミを餌にした赤い糞によるもので、魚だと青くなるという。ペンギンが人間に愛されるようになったのはごく最近で、それまでは食用、羽毛、オイル用に捕獲されていた。中でもペンギンオイルは高価で取引されたという。

自然界では南半球にのみ棲むペンギンだが、北半球最大のペンギン生息地は日本で2,500羽程が飼育されている。この数は北半球のペンギンの25%で、世界1だという。日本がこれほどまでにペンギン大国になった大きな理由は、クジラを求めて遠く南極海まで行き、「お土産」としてペンギンを日本まで持ち帰ったことに始まるという。



### <ルーメル海峡>

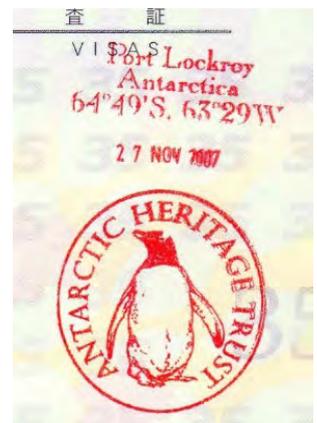
昨日のパラダイス湾から南へ50km、パラダイス湾と並ぶビューポイントであるルーメル海峡通過のアナウンスが流れた。今日も晴れた。海峡の幅はわずかに400mである。海峡に入ると氷塊の浮くのどかな海が、両側に険しい山々が迫ってきた。風速6m/sec.気温4℃だが、体感温度はもっと低い。行く手に氷塊が増え、所々で帯状になってきた。ソディアックでの上下船時に見たクルーズ船の凹みや傷を思い出す。目の前にはかなり大きな塊もある。ゆっくりゆっくり止まることなく進むが、時々ゴツンという低重音が腹に響く。同時に船体がグラツト揺れる。

左岸から朝の陽光が射してきた。採光が尖峰の周りに輪を造っていた。船の後部に回ってみた。氷塊が航路の両側に綺麗に弾き飛ばされていた。この海峡を調査、測量したのがベルギー隊で、それを援助したベルギーの探検家、チャールス ルーメルの名をとったと聞いた。風向きだろうが、急に氷塊が消えた。海面は両側にそそり立つ氷と岩の山を寸分違わず映す鏡と化した。



### ＜イギリスの南極基地＞

正午、本クルーズ中最南端の南緯 65° 11'、西経 64° 08' を通過のアナウンスがあった。とはいっても、極圏まではまだ 150 kmもある。午後、ユニオンジャックがはためくガウディール島のポート ロックロイに上陸した。1940 年後半からのイギリスの古い基地の 1 つ Port Lockroy Antarctica が建っていた。壁面は黒、窓枠と扉は赤に色分けされていた。かつては第一線の研究所だったが、現在は奥地に引っ越したため、古い研究、生活用具などを展示する博物館兼ポストオフィス、南極グッズショップを兼ね 3 名が常駐していた。ここに投函された郵便物は、フォークランド経由で本国に送られてから各国に空輸されるとのことだった。



基地の周りはジェンツーペンギンの営巣地がひしめき合っていた。排泄物が堆積し、匂いが充満していた。オレンジ色と緑色の糞の割合は 9 : 1 位で、圧倒的にオキアミを餌にしていた。ペンギンとの共存・・・言葉は綺麗だが、ペンギンの中に人間となると、現実的にはかなり厳しいようだ。

隣接する島には鯨の白骨が雪に埋もれていた。ここもまた捕鯨基地だったという。先のホェーラ



ーズ湾のデセプション島もまた捕鯨基地で、崩れ果てた建物の一部は鯨油採取が目的だったという。でも、ノルウェーの基地だったら日本同様の鯨文化を持ち合わせているので無駄なく利用していたと思いたいが、イギリスとなると鯨油以外は廃棄されていたのだろうか。



ポート ロックロイで購入した切手

## ② 北極圏

### <北極上空は飛行機の銀座通りだった>

北極は南極と異なり大陸に囲まれた海で、海洋の分類からすると地中海である。北極もまた南極同様に探検の舞台となった。1958年、アメリカの原子力潜水艦ノーチラス号が海氷の下を航行して北極海を横断した。1978年には、植村直己らが北極点に到達している。70年代後半からは、科学的なデータ収集も進み、地質時代ごとの環境変化も明らかになってきた。

また、北極上空はアメリカ西海岸、アジアとヨーロッパを結ぶ航空路として重要な役割を果たしてきた。スウェーデン、デンマーク、ノルウェーのスカンジナビア3カ国が共同運航するスガンジナビア航空（SAS）が1952年にロサンゼルスから北極経由でコペンハーゲン、さらに1957年にアラスカのアンカレッジで給油し北極を越えるコペンハーゲンと東京を結ぶ路線を開設した。これにより、南回りで50時間近くかかっていた飛行時間を一挙に27時間に短縮した。1961年にはジェット機の導入によりパリまで19時間で結ばれていた。1986年、日本とヨーロッパを結ぶ最短距離のシベリア上空経由の空路が開設された。その結果、東京～パリ間は12時間に短縮、北極上空を飛ぶヨーロッパ航路は姿を消した。

**【資料】** 2022/2ロシアによるウクライナへの軍事侵攻が始まった。これによりロシア上空の飛行が制限された。東アジア諸国とヨーロッパを結ぶ飛行ルートはシベリア上空経由の最短コースを飛行できなくなり、中央アジア経由の南回りか、アラスカと北極圏経由の北回りで飛行している。飛行時間は2：30～4：00長くなっている。冷戦時代に逆戻りである

### <ノーザンライト>

スカンジナビア半島北部からコラ半島にかけての北極圏以北を「ラップランド」、ラップ人の土地と呼んでいる。サーミ人は、ノルウェー、スウェーデン、フィンランド、ロシアにまたがって住んでいる。国境がひかれる以前からトナカイの群れを連れ、夏と冬の草場を移動する遊牧生活を繰り返してきた先住民族である。

2000/2、オーロラを見たい衝動に駆られスウェーデンのドントレットを訪れた。オーロラへの芽生えは子どもの頃まで遡る。そして、70余年を隔てても期待を裏切ることはなかった。ローマ神話に出てくる夜明けの女神「アウロラ」が語源だという。オーロラはフィンランド語で「レヴォントレトゥ」（火のキツネ）で、北極圏の雪原をゆくキツネの尻尾ではたいた雪が舞い上がって無数の火

花になったものだという言い伝えがあるという。

天空の一点から光が噴出し、一気に全天でいろんな形や色のオーロラが動き出す。一条の光が移動する時に円筒になったり、壁になったり、透きとおる絹布にもなる。消えるかと思うと予想もしない方向から湧き出し、縁辺が幾つかの色に染まる。何の統一性もなく、次を予測することは全くできなかった。北欧の先住民サーミの間ではオーロラにも魂があると信じられているというが、まったく気まぐれな存在だった。極光、キツネ火、夜明けの光などとも呼ばれているが、aurora より northern lights の方が一般的だったのは驚きでもあった。

荷物からカメラと三脚を持ち飛び出した。光りのカーテンは自由奔放に、いや気まぐれに姿かたちを変え、色を変えて大空を舞台に乱舞していた。カメラで覗いてみた。ファインダーに区切られた動光は、檻のなかの野生動物に似ていた。一条の光は上下で色が微妙に違った。

この自然の妙に神秘と共に、畏敬の念のようなものが湧いてきた。北極圏に住む人々もオーロラをあがめ、幸運をもたらすという考えがあると聞いた。輝く太陽が姿を消しもぐらのような生活が強られるが、極夜は永遠ではなく太陽が再び戻ってくる「証」がオーロラだというのだ。自然の驚異に茫然自失から現実



に引きずり込んだのは、足元から忍び込んでくる寒さだった。飛行機から降りたままの出で立ちだった。幸い、耳と手は無意識のうちに冬山のもので保護していた。コテージへ戻る時、雪は靴で踏まれる度にきゅきゅと鳴いた。

### <スキーのふる里>

スカンジナビア半島北部からコラ半島にかけての北極圏以北をラップランド、ラップ人の土地と呼んでいる。しかし、ノルウェーではトルムソ以北をフィンマルクと呼び、スウェーデンでは単に北部スウェーデンと呼んでいるので、ラップランドの地名が残るのは厳密に言えばフィンランドだけとなった。

2日目、コテージ背後に広がるスキー場に出た。ここドゥンドレット山中腹が森林限界で、頂まで伸びるティバーリフトは吹きさらしの中であった。針葉樹の疎林は細く、雪を被り、凍てつき、所々に倒木があった。多分に宣伝的な意味合いがあるのだろうが、ここに雪が降らなければスウェーデンの何処を探しても雪



正午頃だというのに夕方のように影をのばしていた

は無いといていた。しかし、スロープの脇にはゴロゴロと岩が出ており、積雪そのものは日本緒スキー場の方が遥かに多い。ワールドカップ2コースはじめ、20ばかりのコースが整備されていたが、最長で2,500m、最大高度差が350mだから規模としたら特別取り立てるほどのものではなかった。ところが、クロスカントリーコースとなると最長42kmで、27kmが夜間照明付きと整備されていた。

ドゥンドレット山の頂は広大な台地であった。石膏を流したような山なみを背景にして大きくうねり、波打っていた。極夜明けて間もないこともあり、わずかな凹凸も黒い影を終日伸ばしていた。北極圏特有の乾ききった寒気の中を、台地の端までトレースを伸ばしたい衝動に駆られたが、レンタルのゲレンデ用スキーでは断念せざるを得なかった。この時ばかりは、山スキーを持ってこなかったことを悔やんだ。

世界最北の鉄道の車窓からフォルドを見下ろせるというのでノルウェーに向かった。国境の山並みまでの間は、立木は細く低く大地に遠慮し、その根元には必ずといっていいほど大地に帰る倒木と雪まみれの岩石があった。動くものは雪面を走る風と雪だけだった。時折人家が見えるが、立木同様人間もまた荒野に間借りしている感じだった。

### <人間模様>

オーロラを求めてのラップランドの旅はK.A氏と一緒にした。社長職を退いて直ぐに韓国で有機農業を学び、便利になり過ぎた生活から人間性の回復を目指し、独自の生活スタイルの確立に意欲を燃やしていた。米を栽培し、大豆を栽培して味噌を作り、山から切り出した樹木で炭を焼きと薪づくりをし、海に潜って採りワカメやカキなどを採り、酒の嗜みは人の二、三倍で、人生を大いに謳歌している。

はち切れんばかりに膨らんだ荷物に蕎麦粉、麺棒、麺切り包丁、麺つゆそれに生ネギ、割り箸まで入っていた。ホテル棟フロントで働く日本人女性スタッフがいた。食事は一人より二人、二人より三人の方が楽しいので、「蕎麦を・・・」とお誘いした。こね鉢は小ぶりの金属ボール、こま板はテーブルという不自由はあったが、腕の確かさに加えて、蛇口から勢い良く飛び出す水は鶴岡の水道水を冷やした感じで蕎麦の味を引き立てた。ねじり鉢巻姿での蕎麦打ちにも力が一段とこもり、打ちたて、茹でたての歯切れのいい蕎麦に舌鼓を打った。

3人での会食とおしゃべりは2時間近くに及んだ。フロントの日本人は、フィンランドの旅で北欧が気に入って、ここで冬に仕事をするようになって4年が過ぎたという。日本人のリピーターも増え、結構やりがいがある仕事だと張り切っていた。その一方で、コテージとホテル生活を同一視してしまい、自分のことは自分で考える、つまり「生活力」の欠如からくるごたごたが多いと嘆いていた。傍から見る限り、言葉に不自由することもなく、現地スタッフともいい雰囲気できてきばきと仕事をこなしていたが、かなりのストレスが鬱積している様子だった。

週末、多くのスウェーデンの若者たちでコテージは賑った。ホテル棟のサウナも昨日までののんびりムードは消えた。脱衣室、シャワー室、サウナ室がなんとなく雑然となり、ビール瓶が散乱し、ゴミが目立つようになった。そして、ホテル棟からコテージまでの雪道に点々と黄色のマーキングが見られた。

### <幻と現代版「ノアの方舟」のスピッツベルゲン>

チリのサンチャゴ発、南米最南端の街ウスワイア解散のツアーでパタゴニアを旅した時、スピッツベルゲンで観光ガイドをしているノルウェー人と一緒になった。人間が常住する最北の地に惹かれていたのでスピッツベルゲンでの再会を約束した。ところが、ウスワイアからの帰路、プエノスアイレスのバスターミナルで手荷物の盗難に合い、1 ヶ月間の日記をはじめガイドの名前も連絡先も失くしてしまった。若いときは失った機会は直ぐに巡ってくるが、歳を重ねるにつれてチャンス再来は遠のくばかりである。地球の片隅を巡る旅を続けているが、スヴァールバル諸島は見果てぬ遙かな地のままである。日焼けで色褪せた防寒着姿で穏やかな表情のガイドとの約束を、自分の不注意から守れなくなったことを未だに悔み続けている。

スヴァールバル諸島は、「寒い海岸」の意味で、北緯 74 度から 81 度の北極圏に位置し、ノルウェー領である。「尖がった山」の意味するスピッツベルゲン島中心にいくつかの島々からなり、およそ 2,600 名が居住している。

12 世紀、バイキングによって発見され、16 世紀にイギリスとオランダの捕鯨基地となり、19 世紀に入ると良質の石炭が発見された。主な産業は石炭採掘だが、タラやニシンなどの漁業も盛んである。他にシロクマ、ホッキョクキツネ、アザラシやクジラなどの野生動物ツアーが人気を集めている。島内に点在する集落を結ぶ道路はなく、犬ゾリやスノーモービルで行き来していると聞いた。

この島は寒帯のツンドラ気候に加え、自然災害の少ないことから永久凍土層の中に 300 万種の種子を保存するという国際的なプロジェクトが 2008 年から始まった。今後予想される深刻な気候変動や自然災害、植物の病気の蔓延、核戦争などに備えて農作物の絶滅を防ぐことを目的とした植物版「ノアの方舟」で、ノルウェー政府が所有、管理している。